

# 庄内藩江戸勤番武士の行動と表象

岩淵令治

Activities and Representations of Shonai Clan Samurai Warrior on Duty in Edo

IWABUCHI Reiji

はじめに

## ① 日記の概要と勤務

## ② 外出と表象

おわりに

### 【論文要旨】

巨都市江戸には、各地から参勤交代で出府し滞在する江戸勤番武士が多数存在した。本稿では、江戸勤番武士と都市社会とのかかわりを検討するという視点から、庄内藩中級藩士の四回の江戸滞在中の日記（一八四三―一八五四年）を分析し、江戸における外出、および彼が実際に体験した江戸をどのように表象しているかを検討した。

まず外出は、勤務日との関係で藩邸から半径二kmまでが中心となり、多くは徘徊と買物を目的としていた。遠出の回数は限られ、訪問先の多くは、季節の花見や祭礼、新吉原、猿若町の芝居などいずれも江戸の名所・名物であった。ただし、複数回訪れる場所は少なかった。新興の名所や流行の芸能者の見物も確認でき、彼は錦絵や名所案内記やひんばんに出される刷物などの情報と、同僚からの情報などを得て行動していたと思われる。また、特定の神仏の参詣（愛宕社・浅草子育地蔵）、自身の趣味・関心による見物（深川三十三間堂の通し矢・釣り・相撲観戦・うなぎ屋、儒者・供頭という職務上の関心による見物（下馬見物・湯嶋聖堂・儒者の墓めぐり）など、彼

の個性による訪問がみられた。これらの特徴は、江戸藩上級藩士の行動と共通する。

さらに、実見した名所や芸能について、自身の価値判断で表象している。無粋な田舎侍（浅黄裏）と「江戸ツ子」から評された彼らであったが、出版等で発信される「江戸」表象を嚮呑みにし、江戸を右往左往していたわけではなかった。すでに「江戸風」の文化は国元に存在しており、歌舞伎や相撲を見る目は、出府以前よりある程度鍛えられていたのではなからうか。

江戸勤番武士については、節約しながら余暇を物見遊山に明け暮れるイメージと、田舎者というイメージで語られるのが通例であるが、本事例は大きく異なる。さらに所属藩や階層、屋敷の位置など条件の異なる勤番武士を検討し、江戸勤番武士像を描いていく必要がある。

【キーワード】庄内藩、江戸勤番武士、表象、名所、芸能